

02【街の散策からの気づき発見】

日光街道・粕壁宿

会員 K.T.

粕壁宿は江戸時代(1603年～1868年)、日光街道の4番目の宿場町であった。現在の八坂神社(牛頭天王社)のあたりが入口で、出口は今の新町橋あたりになる。道幅4間(約7.3m)、24町35間(約2.7km)の街道で、宿場内の町並みは、通りに沿って、南北10町25間(約1.1km)の広さがあったらしい。

日光街道は江戸(現在の東京)日本橋から日光東照宮門前の鉢石(はついし)に至る街道で寛永13年(1636)頃に完成された。

江戸幕府は公式には日光道中とし、街道には21の宿場町が整備された。旧日光街道・粕壁宿、現在のかすかべ大通りの中ほどにある道標は、長年の風雨に耐えた歴史を感じさせる。



正面、「東 江戸、右之方陸羽みち」、右面、「北 日光」、左面、「西南 い八つき」、背面に天保5年(1834)2月に、木の道標から石の道標に変えられたことが刻まれている。もともとは粕壁宿の西方、新町橋方面と岩槻方面に街道が分かれるあたりに建てられていたらしい。いつの頃からか、ここに鎮座している。

余談ながら、江戸時代の俳聖松尾芭蕉の『奥の細道』の旅立ちは、旧暦元禄2年3月27日(新暦1689年5月16日)であった。門人曾良の通称『曾良の旅日記』によると、

「三月二十七日、「明方、深川出船。奥羽行脚の途に就く。門人曾良同伴。この日、粕壁に泊まる。(中略)

三月二十八日、「粕壁発。栗橋の関所を経、間々田に泊まる。(後略)」とある。

江戸時代の旅は徒歩、奥羽への旅は奥羽街道を歩く、宇都宮までは日光道中と同じ街道になる。日光街道の宿場間距離の資料から試算すると、千住宿から粕壁宿までは28km、粕壁宿から間々田宿までは38km、徒歩で時速4km程度とすると、1日7時間から9時間強を歩く。芭蕉さんは健脚であったようだ。

かつて、木製であった道標は、粕壁宿の西方の街道の分かれ道に建ち、芭蕉と曾良を見送ったであろうと、想像する。また、現在の道標も、木から石づくりに更新されて以来、設置場所は変わっても、190年もの間、「かすかべ」の街の変遷を見つづけていることを思う。

『道標さん、この街に暮す人達の暮らしの環境は、よりよくなっているでしょうか?』

…『暮らしの文明の面では、まちがいなく、よくなっているでしょう。しかし、文化面では、どうでしょうか?』

心のつぶやきに応答があった気がした。私達の暮らしは、人と自然とのかかわりを希薄な生活環境に変えてきた感がある。『文化面は課題があるのでしょね。』、と思う。

文化の定義について、文化庁によると、「文化は、最も広くとらえると、人間の自然とのかかわりや風土の中で生まれ、育ち、身に付けていく立ち居振る舞いや、衣食住をはじめとする暮らし、生活様式、価値観など、およそ人間と人間の生活にかかわる総体を意味する。」、とある。

司馬遼太郎さんは、その著書「アメリカ素描」(1985年)に「文明」と「文化」の定義を述べている。

文明とは、「たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」、文化とは、「不合理なもの・特定の集団(たとえば民族)においてのみ通用する特殊なもの・他に及ぼしがたいもの・普遍的でないもの」、これを、司馬さんは、具体的に説明している。

「(前略)例えば青信号で人や車は進み、赤信号では停止する。この場合の交通信号は文明である。逆に文化とは、日本でいう、婦人がふすまをあけると、両ひざをつき、両手であけるようなものである。立ってあけてもいいという、合理主義はここでは、成立しえない。不合理さこそ、文化の発光物質なのである。同時に文化であるがために美しく感じられ、その美しさが来客に秩序についての安堵感をあたえ、自分自身にも、魚巢にすむ魚のように安堵感をもちこむわけにいかない。だからこそ文化であるといえる。(後略)」、今日「ふすまの文化」は稀有であるかもしれないが、わかりやすい説明だ。

文化とは、不合理なものではあるが、その地域では、すみごちがいい、ということなのだろう。地域の絆が関わる。しかし、昨今の孤独死のニュースを聞くに、「すみごちがいい」とは、いえないのではあるまいか。